

「高天原と神々の様相」

・・・国譲りの舞台は中海周辺か・・・

2021年1月23日
市民研究員 田中文也

1、はじめに

これまで、記紀や風土記に書かれている神々（神話）の時代について、そのエビデンスを求めて科学的な研究作業を行ってきた。その結果、日本の神話は、縄文時代から弥生時代にかけての記録が書かれており、縄文海進など自然科学上の現象が見事に書き留められていることが分かった。したがって、今までフィクションと考えられてきた「神話の世界」が具体的な根拠を持っており、記紀や風土記の神話の大部分は、真実を記録してきたものと判断できた。ただ、それらの現象が、多くの場合「神々の仕業」とされてきたことによって、フィクションと受け止められており、これまで科学的検証も行われてこなかった。

今回、日本の神話の舞台である山陰両県の3つの旧国（出雲、伯耆、因幡）の民俗学的調査（神社の由緒・祭神、地域の伝承）を基調に、歴史学と考古学を融合し高天原から国譲りまでの神々の様相を明らかにする。

2、これまでの神話の国々の様相（高天原、根の堅洲国、葦原の中国）

次の地図上の地域が、記紀神話に登場する舞台である。山陰両県の旧国である因幡の国、伯耆の国、出雲の国、そして、高天原である蒜山である。なぜこれらの国が「記紀神話の



舞台」と言い切れるのか。それは、これまでの研究や拙本で明らかにしてきた様に、「記紀神話」には、山陰両県の3つの旧国しか出てこないからである。

したがって、そのまま記紀を読めば、「日本の国は山陰地方から出来上がって来た」と書かれていると判断できるのである。

詳細は省くが、これまでの研究成果によって、記紀神話の国々は、次ページの図のような配置になることが分かった。高天原は広義では中国山地でその中心は蒜山高原、根の堅洲国は島根半島、葦原の中国は広義では日本列島の平野部で、狭義では山陰両県の3つの旧国の平野部となる。黄泉の国は、「伯耆と出雲の境目」と書かれており、又、現境港市が出雲の国の風土記に「黄泉の島」と書かれているために第1候補となるであろう。

これまでの成果・神々の国の位置関係



尚、蒜山が高天原である理由は、次の根拠による。①歴史学的に見ると、記紀には「稲羽の国」「伯耆の国」「出雲の国」の3つの旧国の具体的な地名が出てくるが「高天原」だけ地名が出てこない。しかし、この3つの旧国に隣接して存在するのが中国山地の真ん中に位置する蒜山である。(地理的に高天原と3つの旧国が行きき出来たことが重要) ②考古学的には、縄文時代から弥生時代にかけて、蒜山で出土する土器は、鳥取県中部と同じものである。③蒜山には天津神を象徴する「円墳」が多く、国津神を象徴する「方墳」がほとんどない。④民族学的には、蒜山の神社に祭られている神々のほぼ全てが天津神である。⑤明治まで、「蒜山」と「鳥取県中部」との交通路が8つほどあり、古代から相当の交流が行われていた。⑥現在でも、蒜山と鳥取県中部地域は、交流が頻繁にある近隣の関係である。⑦蒜山の方言は、岡山弁ではなく、鳥取県中部の方言である。⑧明治の廃藩置県のおり、当初蒜山は鳥取県に入る予定であった。⑨蒜山の地名は、漢字で表すことが出来ない地名が多く、相当古い時代からの名残を残している。⑩蒜山を源流として流れ出ている「天神川」の意味は、「天津神の川」であった可能性がある。

非常にコンパクトではあるが、記紀に書かれている山陰地方の3つの旧国と中国山地の中心で、この3つの旧国に隣接する蒜山が、記紀神話に書かれた舞台と考えられる。

3、文明が発祥する条件について（日本文明発祥の地の条件）

ここで、文明が発祥する根本原因について明らかにしておく必要がある。なぜなら、山陰両県の圏域で日本の古代文明が発祥していたなら、文明発祥の根本原因に合致している必要性があるからである。その傍証として、まず出雲の国の風土記の記述を示したい。

①朝酌の瀬戸の渡り・・・大小さまざまな魚が時節に応じて群がって・・・風を押し水を突く・・・あるものは網を裂くほどだ。(現矢田の渡し付近)

②邑美の冷水・・・泉がきらめき、流れている。男も女も老人も子どもも、時節ごとに集まって、いつも宴会をする地だ。(現松江市大海崎町にあった泉)

③前原の埜・・・沢山の鳥が時節ごとにやってきては棲む・・・男も女も、時節ごとに群がりあい集い、遊びふけて帰ることを忘れる者もいる。いつも宴会を楽しむ地だ。（現松江市大海崎町の海岸）

もともと山陰地方は、日本列島の中で北方種と南方種が同時に生息できるたぐいまれな環境を有しており、常時食糧を提供できていたのだが、この記述からも了解できる。つまり文明が発祥する条件は、食糧の供給ができて定住できることが前提であることが分かる。

紀元前後の最大の都市はアレキサンドリアであり、その人口は30万人を有していたとされる。魏志倭人伝の記録によると、同じころ朝鮮半島の帯方郡も楽浪郡も数千戸あったと書かれている。1戸に3人住んでいれば1万5千人、5人住んでいれば2万5千人の人口があったことになる。しかし、邪馬台国については7万戸あったと書かれている。つまり、1戸に3人住んでいれば21万人、5人住んでいれば35万人の人口があったことになるのである。記紀が書かれた頃の日本の平安京でも15万人を有していたことを考えれば、邪馬台国の人口は、当時トップであり、世界最大の都市であった可能性がある。

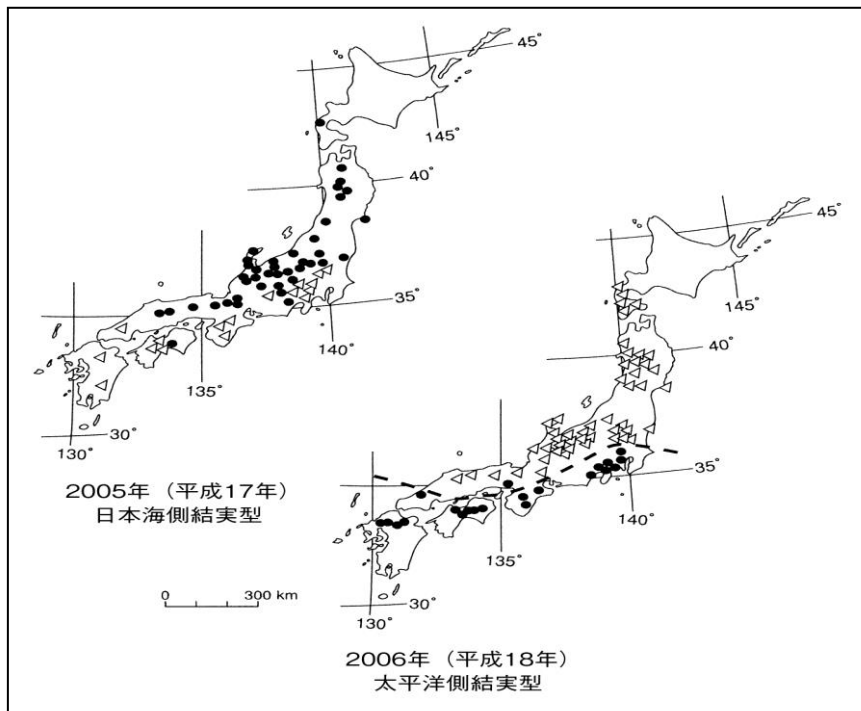
この根本的な原因は、**膨大な人口を養うことが出来る大量の食糧の存在**が、そのエビデンスとなる。まだ管理経済に移行していない時代、やはり、常時食糧が提供できる場所に邪馬台国があった可能性が高く、その条件を満たしていたのは山陰地方であった。



米子水鳥公園のオオヨシキリ（南方種）とコハクチョウ（北方種）

白兔海岸のハマナス（自生南限地で北方種）と美保関のサンゴ礁（南方種）





ブナの北方種（日本海側のブナ）と南方種（太平洋側のブナ）の分布図、大山と蒜山地方で、両者が重なっている。（南方種と北方種が重なっているという事）

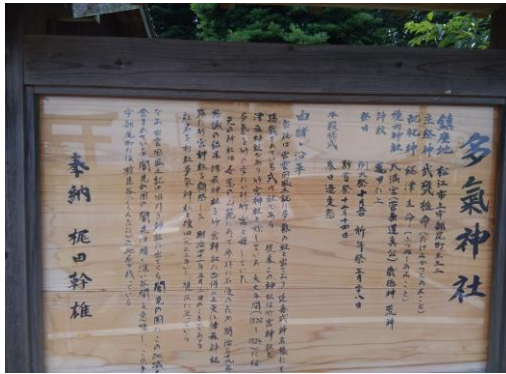
4、国譲りの舞台は中海周辺か

著者は、前回までの報告で、前節で紹介した出雲の国の風土記に記載された年中自然に市がたつ3つの場所と、日本3大船神事のホーライエンヤに船を出す5つの集落が、同じ圏域にあることを報告した。（下図参照）



今回この2つの場所が重なるエリアの中の神社と祭神の調査を行った。北から順に、久良彌神社、多気神社、十二所神社、大井神社の4つである。次ページに北の順番から神社

の写真を示す。又、参考のために瀬戸の渡しを含めた展開図をさらに次頁に示す。尚、全ての神社からは大山・蒜山（高天原）が展望できた。





この様に、中海に面する標記エリアには、風土記に書かれた自然に市がたつ場所と、ホーランエンヤの船を出す5つの場所と、4つの神社が重なって存在していた。

問題は、この4つの神社の祭神である。久良彌神社の祭神は「建御名方命」であり、国譲りの最後に事代主命が大国主命に代わって国譲りの決断をした後、これに反対し「武御雷命」と争い長野の諏訪湖まで逃げ、「ここからは出ないと約束をした」とされる神である。

多気神社の祭神は、国譲りの交渉の最後に高天原から使わされた「武御雷命」と「経津主命」である。記紀には、「武御雷命に経津主命をつけて遣わした」と書かれている。

十二所神社は、高天原の12神が祀られている。当初は「十二神神社」ではなかったかと思われる。なぜこの場所に高天原の神々が祀られているのか。解明が必要である。

大井神社は、大国主命が祭神で、今は周辺の神社が合祀されているが、元々は大国主命のみだったと由緒に書かれている。大井窯跡があり、古代の一大陶器制作工場があった。

つまり、高天原との交渉に臨んでいた国津神の代表である「大国主命」と、国譲りの交渉の最後に降りて来た「武御雷命」と「経津主命」、さらに国譲りに反対してこの「武御雷命」と争いを行った「建御名方命」が、この圏域に揃って祀られていることになる。まさに、国譲りの主な舞台俳優が、この狭い圏域にみんな揃っていることになるのである。ここで、過去に報告したデータ全体をまとめて整理すると、次頁の表一覧の様になる。

すなわち、高天原から国譲りの「言問い」に降り立っていた天津神達は、言問いの浦から西に向かって船出を行い、中海の周辺の浜辺のどこかで交渉を行っていた可能性があるのである。

国譲りの舞台は中海周辺か？

- ✳ 高天原から鳥取県中部に降り立ち、言問いの浦から交渉に出かけていた天津神達は、西に向かって船出をしていた（武御椎命の腰かけ岩）
- ✳ 天穗日命（2人目の使者）が、安来市吉佐に天下ったと書かれている
- ✳ 又、安来市吉佐は「キサカイ姫」がいた場所なので、「キサ」という地名が付いている
- ✳ 大国主命は、国譲りの判断を仰ぎに美穂の崎にいる事代主命に速船（諸手船）を出したが、出雲の地からでは遠すぎる
- ✳ 事代主命は、揖屋町（東出雲町）に夜這に行っていたので、中海周辺にいた可能性が高い
- ✳ もう一人の国津神である少彦名命は、粟島神社に鎮座している
- ✳ 粟島神社の伝承では、この地で大国主命と少彦名命が合流したと伝えられている
- ✳ 記紀には大国主命と少彦名命は、ともに美保の崎から入って来たと書かれている（対馬海流に乗ってきた渡来人の可能性を示唆している）
- ✳ 大国主命は、国譲りの後に出雲の地に治まったと書かれているので、その前は出雲の地には居なかったと理解できる
- ✳ 境港市の寄り合い神社は、神在月に日本中の神様が集まって寄り合いをしていた場所である（相談が決まったあとに杵築大社に移っていた）

5、高天原と神々の様相（記紀神話の舞台のあらまし）

最後に、これらの神々の神社と祭神の説明を行い、併せてその分布を整理し、全体を図に展開する。

- 倭文神社・・・天の若日子（下照姫と結婚し、復命しなかった神）
- 亀谷神社・・・木の花咲夜姫（塩土の翁に紹介されて、瓊瓊杵尊と結婚する姫）
- 岩崎神社・・・武御雷命（国譲りの最後の使者、腰掛岩も残されている）
- 大宮神社・・・瓊瓊杵尊（国譲りの後に降臨した天照大神の孫）
- 方見神社・・・天照大神（高天原の中央神、3貴神の一人）
- 美保神社・・・事代主の命（大国主命に代わり、国譲りの決断をした神）
- 寄合神社・・・日本中の神々が神在月に集合して、衆議を行う神社）
- 神代塚古墳・・・天穗日命を祀った墳墓（天照の息子、国譲りの立役者）
- 粟島神社・・・少彦名命（日本中を歩いた子ども、数千人の少年少女）
- 大井神社・・・大国主命（国津神の代表、日本中を歩いた大人、百工）
- 十二所神社・・・高天原の十二神が祀られている（元は十二神社？）
- 多気神社・・・武御雷命、経津主命（国譲りの最後の使者）
- 久良彌神社・・・建御方命（武御雷命と国譲りで争った神）

高天原と神々の様相

国譲りは中海周辺か



6、おわりに

今回、記紀に記載されている国譲りに関して、その舞台である山陰地方の様相を明らかにするために、記紀の記載・風土記の記載をもとに、書かれている圏域の調査を行った。

今回追加調査を行った中海圏域には、国譲りの交渉の主だった主人公の神々が狭いエリアに揃っていることが分かった。又、このエリアは風土記に書かれている「年中自然に市がたって、帰ることを忘れる場所」でもあり、ホーランエンヤの船を出す5地区が存在する場所とも重なっていた。

このように、記紀・風土記の伝承地、遺跡、神社と祭神の分布等を、記録に基づき調査を行うと、記紀神話の世界がほぼ原形通りに復元できた。高天原から、高千穂、言問いの浦、否さの浜、などの記紀神話の舞台が、書かれている通りに山陰地方で展開していたのである。したがって、国譲りの交渉の舞台は中海圏域であった可能性が高く「否さの浜」も中海周辺のどこかに存在すると考えられた。

邪馬台国山陰説は、記紀神話や風土記、地域に残された伝承等に史実が含まれている可能性があると考え、考古学的発掘調査も含めてこれまで科学的検証を行ってきた。

今回の調査でその全容の骨格が確認できたと考えるが、まだ未調査の内容もあり、今後とも引き続き研究調査を進めていきたい。

元医療放射線防護研究専門委員会研究員（東京大学医学部&物理学部）、元厚生省健康政策研究事業医療放射線防護の研究班研究員、安齋平和・科学研究所客員研究員（放射線被曝バク解析）、島根県立大学北東アジア地域研究センター市民研究員、元全国邪馬台国連絡協議会副会長（中四国支部長）、古代史・神話ネットワーク代表幹事、山陰精神／心理・薬理研究会幹事、山陰古代史研究会代表、古代史研究家、田中文也

